

# 人の顔

夢野久作

青空文庫



チエ子は奇妙な児こであつた。

孤兒院に居るうちは、ただむやみと可愛いらしい、あどけない一方の児であつたが、五ツの年の春に、麴こうじまち町の番町に住んでいる、或る船の機関長の家庭うちに貰もらわれて来てから一年ばかり経つと、何となく、あたりまえの児と違つて来た。

背丈けがあまり伸びない上に、子供のもちまえの頬の赤味が、いつからともなく消えうせて、透きとおるほど色が白くなるにつれて、フタカイまぶた瞼の眼ばかりが大きく大きくなつて行つた。それ

と一緒に口数が少くなつて、ちよつと見ると唾おし兒ではないかと思  
われるほど、静かな兒になつた。そうして時たま口を利く時には、  
その大きな眼を一パイに見開いて、マジマジと相手の顔を見る。  
それから、その小さな下唇を、いく度もいく度も吸い込んだり出  
したりしているうちに、不意に、ハツキリした言葉つきで、飛ん  
でもないマセた事を云い出したりするのであつたが、それが又チ  
エ子を、たまらない程イジラシイりはっ恠澆な兒に見せたので、両親は  
大自慢で可愛がるのであつた。チエ子が一番わるい癖の朝寝坊で  
も、叱るところでなく、かえつて手数のかからない兒だと云つて、  
自慢の一ツにする位であつた。

しかしチエ子にはもう一ツ奇妙な……しかしあまり人の目につ

かない特徴があつた。それは何の影もない大空と屋根との境い目だの、木の幹の一部分だの、室の隅へやツコだのを、ジイツと、いつまでもいつまでも見つめる癖で、すぐ近くから呼ばれているのに気がつかないで、空のまん中に浮いている雲だの、汚れた白壁の途中だのを一心に見上げていたりするのであつた。

母親はこの癖に気付いているにはいたが、溫柔おとなしい児にはあり勝ちのことなので、さほど気にかけていなかった。いくら呼んでも来ない時に、

「チエ子さん……何を見ているのです……」

なぞと叱ることもあつたが、本当に何を見ているのか、きいてみた事は一度もなかった。

ところが、チエ子が六ツになった年の秋の末のこと、外国航路についている父親から、真赤な鳥の羽根のがいつとう外套を送つて来た。それは和服にも着せられる、つりがねがた鐘型の風変りなもので、その深紅の色が何ともいえず上品に見えた。

母親は早速それをチエ子に着せて、自分も貴婦人みたようにケバケバしく着飾つて、四谷へ活動を見に連れて行つた。母親は、どちらかといえは瘦せギスで、背丈けが普通なみの女以上にスラリとしているの、チエ子の手を引いて行くのはいくらか自烈度じれつたいらしかつたが、それでも、二人とも新しいフェルトの草履ぞうりを穿はいて、イソイソとしていたので、誰が見てもホントウの親子に見えた。

活動が済むころから、風がヒユウヒユウ吹き出したので、かなり寒い、星だらけの夜になった。

その中を二人は手を引き合つて帰つて来たが、嫩葉わかば女学校の横の人通りの絶えた狭い通りへ這入ると、チエ子が不意に立ち止まつて母親を引き止めた。そうして、いつもよりもずっとハッキリした声を、建物と建物の間のくら暗やみに反響さした。

「……おかあさん……」

母親はビツクリしたようにふり返つた。

「何ですか……チエ子さん……」

「あそこに……お父さまのお顔があつてよ」

と云いつつチエ子は、小さな指をさし上げて、高い高い女学校の屋根の上を指した。ゆびさ

母親はゾツとしたらしく、思わず引いている手に力を入れて叱りつけた。

「何です。そんな馬鹿らしいこと……」

「イイエ……おかあさん……あれはおとうさまのお顔よ。ネ……

ホラ……お眼々があつて、お鼻があつて……お口も……ネ……ネ……

……ソウシテお帽子も……」

「……マア……気味のわるい……。お父様はお船に乗つて西洋へ行つていらつしやるのです。サ……早く行きましょう」



「デモ……アレ……あんなによく肖にててよ……ホラ……お眼々のところの星が一番よく光つてよ」

母親はだまって、チエ子の手をグングン引いてあるき出した。チエ子も一緒にチヨコチヨコ駈け出したが、暫くすると又、不意に口を利き出した。

「おかあさま……」

「……何ですか……」

「アノネ……おうちのお茶の間の壁が、こないだの地震の時に割れているでシヨ……ネ……ギザギザになって……あそこにどこかのオジサマやオバサマの顔があつてよ。大きいのも小さいのや、いくつも並んで……ソウシテネ……ソウシテネ……また方々にい

くつも人の顔があつてよ。お隣りのお土蔵くらの壁だの、おうちの台所の天井だの、お向家むかいの御門の板だの、梅の木の枝だの、木の葉の影法師だのをヨ——ク見ていると、いろんな人の顔に見えて来てよ。きようお母様に見せていただいた活動のわるい王様でも、綺麗なお姉さまの顔でも、キツトどこかにあつてよ。明日あしたになったら、あたしキツト……アラ……お母さまチヨツト……あそこに……」

と云いさしてチエ子は又急に母親の手を引き止めた。

「……ホラ……あの電信柱の上に、小さな星がいくつも……ネ……ネ……いつもよくうちにいらつしやる保険会社のオジサマの顔よ……お母様と仲よしの……ネ……」

母親はギツクリしたように立ち竦んだ。下唇をジイと噛んでチエ子の顔を見下した。わなわなとふるえる白い指先で、鬢のほつれを撫で上げながら、おそろしそうにソロソロと、そこいらを見まわしていたが、何と思つたか突然に、邪慳にチエ子の手を振り離して小走りに駈け出した。

「アレ……おかあさまア……待つて……」

とチエ子も駈け出したが、石ころに躓いてバツタリと倒おれた。その間に母親は大急ぎで横町へ外れてしまった。

チエ子はヒイヒイ泣きながら、起き上つてあとを追いかけた。泣いては立ち止まり、走り出しては泣きしながら、辻々の風に吹き散らされて行くかのように、いくつもいくつも御角を曲つて、

長いことかかつてやつと、見おぼえのある横町の角まで来ると、  
お向家むかいの御門の暗い軒燈けんとうの陰から、真白な、怖い顔をさし出し  
て、こちらを見ている母親の顔が見つかった。

チエ子はそのまま立ち止まって、声高く泣き出した。

## 三

それから後のち、母親はあまりチエ子を可愛がらなくなった。

「……もうチエ子さんは、じき学校に行くのですから、独りでね  
んねし習わなくてはいけません」

と云って、茶の間に別の床を取って寝かして自分は一人で座敷

の方に寝るようにした。活動なぞにも、それから一度も連れて行かないで、自分ばかり朝早くからお化粧をして出かけると、夜遅くまで帰って来ない日が続くようになった。帰りがけにチエ子の大好きな、絵本を買って来るようなこともなくなった。

けれどもチエ子は、別に淋しがるような様子はなかった。それかといって女中と遊ぶでもなく、今までの通り古い絵本を繰り返して拵げたり、いろんなものをジツと見つめたり、人の顔らしいものを地べたに描<sup>か</sup>いては消したりして遊んだ。それから日が暮れて、女中と一緒にお茶の間で、御飯をたべてしまうと間もなく片隅に敷いてある寢床の中に、湯タンポを入れてもらって、小さな身体をもぐり込ませる。それでも朝寢坊は今までの通りにしたの

で、どうかすると二三日も母親の顔を見ないことがあった。

「どうしてあなたは、そんなに朝寝をするのですか」

或る朝、珍らしく出て行かなかった母親がこう尋ねると、チエ子はいつもの通り母親の顔を見つめながら、下唇をムツムツさしていたが、やがてオズオズとこう答えた。

「あのね……あたし、お母さまとおネンネしなくなつてから、夜中にきつと眼がさめるの。ソウスルトネ……電燈でんきが消えて真つ暗になつているの。ソウシテネ……上の方をジイ——と見ていると、お向家むかいだの、お隣家となりだの、おうちのお庭にあるゴミクダだの、石ころだのが、いろんな人の顔になつて、いくつもいくつも見えて来るの……ソウシテネ……それをヤツパシじいと見ていると、

そんな人の顔がみんな一緒になつて、いつの間にかお父さまの顔になつて来るのよ……ソウシテネ……それをモットモット、いつまでもいつまでも見ていると、おしまいにはキツトあたしを見てニコニコお笑いになるの……ソウスルトネ……そのお父様と、いろんな事をして遊んでいる夢を見るの……大きな大きなお船に乗つてネ……綺麗な綺麗なところへ行つたり……ソレカラ……」

「いけないわねえ子供の癖に……夜中に睡られないなんて……困るわね……どうかしなくちゃ」

と云い云い母親は、こころもち青褪あおざめた顔をして、チエ子の大きな眼をイマイマしそうに見つめていたが、やがて、急にわざとらしくニツコリして手を打った。

「……アツ……いいことがあるわよチエ子さん。お母さんがネ……おいしいお薬を買って来て上げましょうネ。ソレをのむとキツとよく睡られて、朝早く起きられますよ……ネ……晩によくオネンネをして、朝早く起きる癖をつけとかないと、今に学校に行くようになってから困りますからね……ネ……ネ……」

チエ子は不思議そうな顔をしいしいおとな溫柔しくうなずいた。そうしてその晩から、母親に丸薬をのまされて寝ることになったが、そのお蔭かして、あくる朝は割り合いに早く眼をさましたのであった。

それ以来母親はまた、不思議に家うちに居つくようになった。朝のお化粧もやめてしまったが、その代りに夕方になると急にソワソ



ワし出して、お湯に行ったり、おめかしをしたりして、まだ明るいうちに夕飯を仕舞うと、女中とチエ子を追い立てるようにして寝かした。そうして、チエ子が一度でも朝寝をすると、その晩から丸薬を一粒宛ずっふ殖殖やしたので、一と月と経たないうちに、粒の数が最初の時の倍程になった。

チエ子は一日一日と瘠せ細って、顔色がわるくなって来た。

#### 四

そのうちに、あくる年の二月の末になって、チエ子の父親が、長い航海から帰って来たが、玄関に駈け出して来たチエ子を見る

と、ビツクリして眼を瞭みはつた。

「どうしてこんなになつたのか」

と、短気らしく大きな腕を組んで、あとから出て来た母親にきいた。しかし母親がまじめな顔をして、何か二言二言ふたことみこと云いわけをすると、間もなく納得したらしく、組んでいた腕をほどいて元氣よくうなずきながら、靴をスポンスポンと脱いだ。

それから襠どてら袍ぽうに着かえて、チエ子と並んで夕飯のお膳について、何本もお銚子を傾けた父親は、赤鬼のようになりながら大きな声で、今度初めて行った露西亞ロシアの話をした。そのあいまあいまにチエ子がこの頃は特別に溫柔おとなしくなつた話をきかされたり、久し振りに結ゆつたという母親の丸鬚まるまげを賞めて、高笑いをしたりしてい

だが、そのあげく、思い出したように柱時計をふり返つてみると、飯茶碗をつき出して怒鳴った。

「オイ飯だ飯だ。貴様も早く仕舞つて支度をしろ。これから三人で活動を見に行くんだ」

「エ……………」

「活動を見に行くんだ……………四谷に……………」

お給仕盆をさし出しかけていた母親の顔がみるみる暗くなつた。  
おび 魔えたような眼つきで、チエ子と、父親の顔を見比べた。

「何だ……………活動嫌いにでもなつたのか」

と父親は箸はしを握つたまま妙な顔をした。母親は、泣き笑いみた  
ような表情にかわりながら、うつむいて御飯をよそつた。

「そうじゃありませんけど……あたし今夜何だか……頭が痛いよ  
うですの……」

父親は平手で顔を撫でまわした。

「フーン。そらあいかなぞ。半年ぶりに亭主が帰って来たのに、  
頭痛がするちう法があるか……アハハハまあええわ、それじゃ  
去年送った、あの外套がいとうを出しとけ。チエ子の赤い羽根のやつを  
……。あれは俺が倫敦ロンドンで買ったのじゃが、日本に持って来ると  
五十両以上するシロモノだ。ここいらの家の児うちであんなのを着と  
るのはなからう……ウンないじやろう。ない筈だ。ウン……。あ  
れを着せて二人で行って来るからナ……貴様は頭痛がするんなら  
先に寝とれ……座敷に瓦斯ガスストーブを入れてナ……ハハ久し振り

に川の字か。ハハン……しかし要心せんといかん……」

「それほどでもないんですけれど、永いこと丸髷に結わなかつたせいかもしれませぬ」

と母親は、お茶をさしながら甘えるような、悄気しよげた声で云つた。

「イヤ……いかんいかん。そんな事を云つて無理をしちやいかん。

今年は上シャンハイ海のチブスがひどいからな。……ナニ俺か。俺は大

丈夫だ。この上からマントを着てゆく。帽子は鳥打とりうちがええ。ウ

ン。それからトランクの隅にポケットウイスキーがあるから、マ  
ントのポケットに入れとけ……日本は寒いからナ……ハハハハハ」

## 五

活動を見ながらウイスキーをチビリチビリやっていた父親は、  
いよいよいい機嫌になって帰りかけた。

よつやみつけ

四谷見付で電車を降りると、太い濁った声で、何か鼻唄を歌い  
歌い、チエ子と後になり先になりして来たが、やがて嫩葉わかば女学校  
の横の暗いところに這入ると、ちょうど去年の秋に、母親と立ち  
止まったあたりで、チエ子は又ピッタリと立ち止まった。

「オイ。早く来んか。怖いのか……アアン……サ……お父さんが  
手を引いてやる……」

と、二三間先へ行きかけた父親が、よろめきながら引返してみ  
ると、チエ子は暗い道のまん中に立ち止まって、一心に大空を見

上げている。

「何だ……何を見とるのか」

「……あそこにお母さまの顔が……」

「フーン……どれどれ……どこに……」

と父親は腰を低くして、チエ子の指の先を透かしてみた。

「ハハア……あれか……ハハハハ……あれは星じゃないか。

星霧せいむ

ちうもんじやよあれは……」

「……デモ……デモ……お母様のお顔にソツクリよ……」

「ウーム。そう見えるかナア」

「……ネ……お父さま……あの小さな星がいくつもいくつもある

のがお母さまのお髪つむよ……いつも結つむっていらっしやる……ネ……

それから二つピカピカ光っているのがお口よ……ネ……」

「……ウーム。わからんな。ハハハハ……ウンウンそれから……」

「それから白いモジヤモジヤしたお鼻があつて、ソレカラ……アラ……アラ……あのオジサマの顔が……あんなところでお母さまのお顔とキツスをして……」

「アハハハハハハ……冗談じゃないぞチエ子……何だそのオジサマというのは……」

「……あたし、知らないの……デモネ……ずっと前から毎晩うちにいらつしてネ……お母様と一緒に座敷でおねんねなさるのよ。あんなにニコニコしてキツスをしたり、お口をポカンとあいたり



「……」

と云いさしてチエ子は口を噤つぶんだ。ビツクリしたように眼を丸くして、父親の顔を見た。

しやがんでいた父親は、いつの間にか闇の中に仁王立におうだちになっていた。両手をふところに突込んだまま、チエ子の顔を穴のあくほど睨にらみつけていた。

チエ子はそれを見上げながら、今にも泣き出しそうに眼をパチパチさした。そうして、云いわけをするかのようにモジモジと、小さな指をさし上げた。

「……こないだは……アソコに……お父さまの顔があつたのよ

「……」



# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「日本探偵小説全集 第十一篇 夢野久作集」改造社

1929（昭和4）年12月3日発行

初出：「新青年」

1928（昭和3）年3月

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000年7月4日公開

2014年1月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人の顔

夢野久作

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>